

モスラと皇室 —神話の重層化による文化ナショナリズムの生成—

本 間 光 徳

【要旨】

東宝映画『モスラ』¹に登場する想像上の蛾の「怪獣」モスラは、その誕生地がインドネシアと考えられ、原日本像を表象している。原日本像は、日本神話を想起させる「インフアント島神話」と機織りにより想起される。第二次世界大戦前から戦後復興期に至るまで、インドネシアは日本人にとり精神的に分ち難い「第二の日本」であったのである。映画で、モスラの幼虫は突如奥多摩湖に出現するが、その侵入路を合理的に考察すると、相模湾から養蚕が盛んであった多摩地域へ侵入したと考えられる。

養蚕は神話時代から現代に至る皇室の伝統と見做され、特に明治以降の「ご養蚕」は殖産興業の旗振り役を務めた。『古事記』や『日本書紀』、浮世絵などの出版文化を通し、養蚕や機織り文化は皇室と強く結びつき、神話は重層化されているのである。

モスラは進撃中一方的に人間から攻撃を受けるのみで、自ら積極的な攻撃をしない。「エアゾール爆弾」で攻撃されても繭を焼かれても反撃すらせず飛び去る。モスラが東京の破壊を最小限にとどめ、妖精救出という作品に設定された目的本能のために、意図せずもその羽ばたきにより「ニューカークシティ」を破壊してしまうという脚本は完全平和主義に立脚しており、文化ナショナリズムの精華と言える。

【キーワード】

インドネシア、皇室、神話、モスラ、養蚕

1 はじめに

日本研究センターでは日本語の授業の他に「歴史学」や「日本文化論」をはじめ、政治、経済、ビジネスなど日本研究において必要とされる科目を提供すると共に日本理解に資する各種の活動を行っている。映画鑑賞はその一環であり、映画『シン・ゴジラ』²の鑑賞も文芸的視点からのみならず、2011（平成 23）年の東日本大震災の津波に起因する原子力発電所の事故、エネルギー政策、日米関係など、多角的文脈で理解されることが期待されている。

東宝の象徴的存在であるゴジラの歴史は 1954（昭和 29）年に公開された映画『ゴジラ』に遡り、2016（平成 28）年公開の『シン・ゴジラ』はシリーズ 29 作目である。約 70 年の歴史を有するゴジラは、日米の研究者間で既に多くの研究がなされている。

一方、ゴジラ同様東宝特撮映画のキャラクターの一つであるモスラは「東宝三大怪獣」³と位置づけられながらも十分研究されているとは言い難い。『ゴジラ』同様、「原水爆映画」とも称される『モスラ』であるが、核戦略・原子力政策への反対を表象するのみならず、蛾である必然性はない。

そこで本研究では、1961（昭和36）年7月30日公開の映画『モスラ』とその原作小説を分析し、思想性と意味作用、更には文化的背景を明らかにすることにより、「日本文化論」をはじめとした文化関連科目の教材研究の一助としたい⁴。

2 先行研究

モスラに関する社会学的研究としては、1992年、佐藤健志が「ゴジラはなぜ日本を襲うのか」⁵と題して発表した論考における言及が指摘され、後年には2007年の小野俊太郎『モスラの精神史』⁶、好井裕明『ゴジラ・モスラ・原水爆』⁷が挙げられる。殊に小野の著作はその題名が示唆するようモスラに焦点を絞っており、ゴジラとの比較による論考や特撮映画の一作品としての論評とは異なるまとまった論考で、養蚕への論及もある。小野、好井共に「南洋」イメージの重要性を指摘しており、筆者も同意するところである。

本稿ではこれら先行研究を踏まえた上で、近代皇室と多摩地域の郷土研究的視点を加えてモスラを論じたい。

3 映画『モスラ』

本論に先立ち、映画『モスラ』の内容を簡単に紹介したい。

貨物船第二玄洋丸が遭難し、船員はロリシカ国が水爆実験を行った南洋⁸の「無人島」、インファント島に漂着し、存在しない筈の原住民に救われた事から現地調査が始まる。島で妖精「小美人」が発見されロリシカ人の興行師により日本へ拉致され、東京で興行の見世物となる。拉致された妖精はテレパシーを使い巨大蛾の幼虫であるモスラを呼ぶ。モスラには妖精を守護する本能があると設定されており、テレパシーで呼ばれたモスラは自衛隊から一方的な攻撃を受けつつ妖精救出の為に日本に上陸するが、興行師は妖精を連れロリシカ国に脱出してしまう。上陸したモスラは東京タワーに営繭、自衛隊に協力するロリシカ軍の兵器で繭を焼かれるが、羽化して成虫となり、ロリシカ国へ飛び妖精を救出する。救出の際ロリシカの都市「ニューカークシティ」がモスラの羽ばたきにより破壊される。そして映画は平和を訴えるインファントの碑文で終わる。モスラに意志は無く全ての行動は本能によるものされ、都市破壊さえも平和主義に対立しない理由が用意されている。

4 モスラと国際関係

映画『モスラ』には原作小説があり、それは『週刊朝日・別冊』1961年1月号に発表された「発光妖精とモスラ」⁹である。同小説は、中村真一郎、福永武彦、堀田善衛の3名による共同作品で、映画の脚本は関沢新一による。脚本第一稿と決定稿の2本が1994年に筑摩書房から出版された中村ら3名の共著『発光妖精とモスラ』（以下、原作小説）に所収されている。作品内の主要登場人物、日東新聞社会部記者の氏名が「福田善一郎」で、3名の作者の氏名から創作されたであろうことは容易に想像される。映画並びに脚本と原作小説間に相違点が認められ、主要な点は以下の通りである（表1）。

相違点	原作小説	映画
共同調査国・軍事条約締結国	ロシリカ国	ロリシカ国
モスラの上陸・出現地	七里ヶ浜	奥多摩湖
モスラの主要進路	京浜国道	青梅街道
営繭地	国会議事堂	東京タワー
最終被災地	ニューワゴンシティ	ニューカークシティ

表1.

ロリシカ国の水爆実験により放射能に汚染されたインファント島で孵化したモスラが、妖精を救出する「本能」の為に、意図せずともニューカークシティを破壊するという映画の設定は、1954年11月3日公開の『ゴジラ』のビキニ環礁に於ける米国の水爆実験批判を継承していると理解して良い。モスラの「ラ」も蛾（moth）にゴジラの「ラ」を継承したと理解しうる。主要批判対象が米国であることは容易に想像されるが、原作小説にある以下の文は1960（昭和35）年1月の「安保改定」を示唆している。

最近この国ではロシリカ国と軍事条約が結ばれ、この条約をめぐって国会の内外に多大の紛乱がまきおこされ、条約は国民の十分な納得のいかぬうちに締結されてしまったのであった。¹⁰

次に、水爆実験の被爆地とされるインファント島は、映画では所在がカロリン群島（以下、カロリン諸島）付近と示唆されている。カロリン諸島の西端、パラオのコロールには日本統治時代は南洋庁が置かれていた。しかし、インファント島の妖精である「小美人」（以下、小美人）が唄う「モスラの歌」はインドネシア語で唄われており、当時の日尼関係¹¹、より正確には、日本とスカルノ政権との蜜月関係を暗示していると言える¹²。

インファント島がインドネシア領であることは後年の『ゴジラ VS モスラ』¹³の小道具の

同島の地図にインドネシア領と明記されていることから疑いの余地は無い¹⁴。戦中から続く当時の日尼関係をインドネシアナショナリズムの視点で見れば、スカルノが権力掌握の為に日本を利用したと言えるが、戦後の世界情勢に立ち日本の国家主義的視点で見れば、インドネシア取り込みは戦後の国際社会への復帰のためのアジアに於ける前哨戦であったと言える。映画ではモスラの進行方向の予想図が示され、地図上に記入された直線は伊豆諸島の三宅島を通り神奈川県の上浦市と横須賀市を貫き東京へ向かっている。実際に地図で検証したところ、同直線の南への延長線上にインドネシアの島々がある。

好井は「あくまで、どこにもないし、よくわからないが、とりあえず、しかしおそらくは南のほう¹⁵」と恣意的なイメージの重要性を説く¹⁶。確かに架空の島の「正確な」所在地はさして問題ではない。しかし筆者はそのイメージの想起される場所がインドネシア領であることに意味を認める。当時のインドネシアを通して想起された「南洋」に投影させる原日本的イメージこそが重要なのである。

5 南洋に投影される原日本幻想

原作小説で、福田善一郎が聞いたとするインファント島の神話は日本神話を想起させる¹⁷。作者福永武彦の脳裏に意識的にせよ無意識的にせよ日本の国産み神話が浮かんだとしても不思議ではなかろう。神話は作品内に周到に配置され、脚本決定稿では巡視船艦橋における医官と艦長の会話により「原子力神話」との対比まで試みられている¹⁸。

インファント島の神話は以下の通りである。

昔、この世がまだ混沌として定まらなかったころ、最初に現れたのは、永遠の夜を治める男神アジマである。霧のように、雲のように、濁って流れて行くもののうち、彼は重たい水気のあるものを下に沈め、軽やかなものを上に押し上げた。¹⁹

伊邪那岐命（紀、伊弉諾尊）・伊邪那美命（紀、伊弉冉尊）二柱の神による大八洲の創生譚との酷似は指摘するまでもなかろう。インファント島の神話によると、男神アジマの半身から女神アジゴが生まれ、女神アジゴが太陽を創る。更にアジゴが自身で引き裂いた身体から妖精アレイナが生まれるというのだが、神話の記述は以下のように続く。

彼女たちはアレイナと呼ばれ、永遠の卵モスラに仕える巫女として、永遠の生命を持っていた。彼女たちは、以前生まれた無数の小さな卵が幼虫になって繭をつくる時の、その糸を取って織物を織った。²⁰

養蚕の日本への伝来年は不詳だが、布目順郎によると「弥生時代中期頃にはすでに北九州において養蚕が行われていたと思われ²¹⁾」、横山岳によると 1 世紀ごろ北九州に伝わったと考えられている²²⁾。文献としては 3 世紀に書かれた「魏志倭人伝」に「蚕桑緝績²³⁾」の記述が認められる。『古事記』・『日本書紀』にも養蚕や機織りの記述があることから、養蚕と皇室、朝廷との公的関係が意識的に促進され、且つまた周知されたと考えられる。

原作小説は神話に続けて、福田善一郎による妖精たちの機織り目撃談を綴っている。

皇室の祖神とされる天照大御神（紀、天照大神）が機織りをしているところに弟神である須佐之男命（紀、素戔鳴尊）が皮を剥いだ馬を投げ入れた一節はよく知られているが、機織りの女神は『古事記』では万幡豊秋津師比売命（よろずはたとよあきつしひめのみこと）、『日本書紀』では栲幡千千姫（たくはたちぢひめ）である。ひめは天照大御神の子である天忍穗耳命（あめのおしほみのみこと）と結ばれ邇邇芸命（ににぎのみこと）を産んだとされる。つまり神話上、機織りの姫から見ると神武天皇は玄孫となる。

また、建国神話に限らず、家内労働である機織りは、日本的「家」イメージに回収され様々な民話に伝承されている例は枚挙にいとまがない。つまり、南洋の孤島、インファント島には原日本のイメージの投影が意図されていると理解して良からう。

架空の島、インファント島を通し作品には被爆国日本の神話時代からの幻影が表現されているのだが、実はこの設定が 1961 年当時の日本人の精神的現実感を描写しているのである。

古来、日本のナショナリズムに影響を与えてきたのは中国大陆である。朝鮮の先に中華、遙か西方に天竺というのが日本に於ける原初的な世界認識であろう。中国大陆に成立した元、清、また南蛮を除けば、日本のナショナリズムに直接的に多大な影響を及ぼしたのはロシアを含めた欧米、即ち、幕末の砲艦外交である。しかし、明治時代になっても「南洋」は、庶民にはおろか指導層にもあまり意識されていない。

「南洋」が俄に意識されるのは大正以降²⁴⁾、殊に一般庶民にあっては昭和以降、「大東亜共栄圏」思想が喧伝されてからである。国内経済が疲弊し閉塞した社会状況下において、「南洋」は当時の「青年たちにとっては極めて働き甲斐のありそうな、未知ではあるが魅力ある憧れの新天地でもあった²⁵⁾」のである。第二次世界大戦期の一般的日本人は漠然とした地理認識の下で、「南洋」に於いて理想の日本、原日本を追い求め、インドネシアに行き着いたと言えよう。南洋に出征した旧日本兵や軍属の記録に、現地の神話と日本の建国神話の相似が多く留められている事実は、現地の神話に対する積極的興味の左証と言えるのではなかろうか。海軍民生要員としてセレベス島に勤務した大室政右氏は日本神話と同じ伝説を聞いた自身の体験と天岩戸の話を聞いた者の手記の存在を書いている²⁶⁾。また、南ボルネオ会長の飛鳥音久氏は、「日本神話を生んだボルネオ」と題し 1942（昭和 17）年から 1947（同 22）年までのボルネオ勤務経験の回想を『戦時回想録』に寄稿しているが、氏は現地で聞いた天岩戸の神話やジャワに伝わるという草薙剣の神話を報告している

27. 同氏は「われわれの体に流れる血の一部には、インドネシア民族と同じ血が何千年、何万年来流れているのではないだろうか。われわれの本当の故郷は、南の島ボルネオであり、ジャワであろうか²⁸」と想像を巡らした上、「戦争を契機として、独立したインドネシア共和国は、日本の父方か母方の本家の再誕生であるとも見られる²⁹」と書いている。当時の日本人の意識は、第二次世界大戦を通し「南洋」を心情的に不可分の「第二の日本」と捉えていたのである。その結果、終戦時の南西方面³⁰では日本の敗戦を受け入れられず、閑院宮春仁王殿下を擁立し現地に第二日本建国を企図する動勢があると報告されている程である³¹。東南アジア史を専門とする永積昭³²は、終戦時のジャカルタの海軍武官府に於ける心情を「もっと基本的にはインドネシア人に対してもつ知識と愛着³³」と表現している。

このように「南洋」に投影される原日本像は、インドネシアという具体的国家により共通の神話を通し具体性が担保されていたと言える。『モスラ』に表現された幻影は、映画公開の1961年当時、日本人の誰もが数年前に思い描いた現実感ある夢だったのである。

6 モスラと蛾のイメージ

モスラとは1961年の東宝映画『モスラ』を始めとし、以降の東宝怪獣映画に登場する想像上の生物で、巨大蛾とされている。つまり、怪「獣」ではなく、巨大な昆虫、敢えて言うなら「怪虫」である。従って、卵から孵化し、幼虫となり、脱皮を繰り返し成長し、営繭、蛹化、羽化する。作品では、インファント島で孵化、幼虫として日本に上陸、東京で営繭し、蛹化、羽化し成虫となる。『モスラ』に於ける成虫の姿は、頭部が白褐色で、細い触角を持ち、体全体が毛羽立っており、胴は短く蜂のような縞模様があり、全体としてミツバチのような体型である。翅の色は赤褐色で、赤い斑紋を持っている。

モスラの体長は成虫が羽を広げた全幅が135メートルと設定されており³⁴、胴の長さ70～80メートルと推定されるが、所詮蛾である。しかも、日本に上陸する時点では幼虫、即ち芋虫である。肉食恐竜がモチーフと思われる怪獣ゴジラと比較すると、蛾とは何とも情けない設定である。そこで本章では、蛾が如何なる表象機能を果たすか考えたい。

近年はLEDの普及により夏の夜の街灯に昆虫がたむろする光景を見なくなったが、1961年当時、闇夜の街灯には多くの蛾が引き寄せられていたことだろう。それは夏の夜の日常であった。如何なる昆虫であろうとその光景はあまり気分の良いものではないが、しかし、一般論として、蛾は好まれこそしないものの、蠅、蚊、ゴキブリほど忌避される昆虫ではなかった³⁵。

1952（昭和27）年、日本初のエアゾール殺虫剤を発売し³⁶、金鳥ブランドで知られる大日本除虫菊株式会社によると、家庭内害虫に不快感を持つ人口は年々増加傾向にあり、駆除対象として「蚊、ハエ、ゴキブリをはじめ、ダニ、アリなど」が挙げられている³⁷。また同社ホームページには17種類の害虫が列挙されているが、蛾は含まれていない³⁸。今日に

至っても、蛾を害虫と見做す意識は一般的に低いのではなかろうか。蛾は人間の生活に直接害を及ぼす訳ではなく、従って農林業従事者を除けば、殊に都市生活者の間では長年にわたり駆除対象ではなかったのである。

しかしながら、日本社会では蛾は蝶と否定的に区別されるようである。それは偏に人間が活動する昼の時間に目撃されるか、活動しない夜の時間に目撃されるか、という点で区別されているのではなかろうか。蛾は昼行性と夜行性が存在することから、日常社会の外、常人の関わり合うべからざる存在の表象としての側面を負っていると考えうる。それは否定的な意味として理解されるかもしれないが、同時に神性を帯びた存在とも理解しうる。

7 蚕

7-1 蚕の実態と文字表記

本章では蚕とは如何なる生物か、また何故漢字「蚕（サン）」が「かいこ」と訓読されるのか確認しておきたい。小野俊太郎がカタカナで「カイコガ」と表記するように、目下論述対象としている昆虫の学名は「カイコガ」である。従って、所謂芋虫状の幼虫は「カイコガ」の幼体である。それを「カイコ」と通称し、「蚕」と漢字表記されるのである。

カイコガは一般的に、卵の大きさが約1mm、約10日間の卵期後、3週間～1ヶ月の幼虫期、10日～2週間の蛹期を経て、羽化し成虫、即ち蛾となる³⁹。幼虫期に4回脱皮し、孵化から1回目の脱皮までが1齢、1回目の脱皮から2回目の脱皮までが2齢、幼虫期の最後が5齢となり熟蚕となる⁴⁰。各脱皮の直前は活動が停止し「眠」状態となる。熟蚕は繭を作る場所を求め這い回り、場所が決まると頭部を大きく振り糸を吐き繭を作る（営繭）。熟蚕は繭の中で次第に動かなくなり蛹に変態する（蛹化）。蛹は成虫に変態し（羽化）脱繭液⁴¹を吐出することにより繭の一部を内部から溶解し、這い出る⁴²。幼虫も成虫も白色のため、野外では目立ち捕食されやすい。しかも幼虫期は自力で桑葉にしがみつことが出来ず容易に落下してしまう。加えて成虫は飛翔能力が無い上、口が無く、捕食・吸水をせず、交尾後（及び、メスは産卵後）死ぬ。従って、自然界では生存不可能な、完全家畜化された生物なのである。

新井小枝子によると、この昆虫「〈蚕〉を表す最も古い形式はコで⁴³」、上代から中古に「カイコ」が用いられるようになった⁴⁴。

新村出『広辞苑』は蚕を「飼い蚕」の意とし、家蚕、御蚕、おしらを同義語に挙げている。諸橋轍次『漢和大辞典』や白川静『字統』は、「蚕」は本来みみずを意味し、糸を吐く虫を意味する「蠶」は別字である点を強調している。増井金典『日本語源広辞典』も語源を「飼イ+子」とし、中国語源として蠶は「糸をふくむ虫」、蚕は「みみずの意」とする。加納喜光『漢字語源語義辞典』は「蚕」と「蠶」の混用を詳細に説明している。加納はコアイメージとして、「隙間に潜り込む」、実現される意味として「カイコ」とした上

で「飼料の中に埋没して、飼料を食らう習性がある」とし、『「かいこ（かひこ）」は飼ひ子の意。古くは単にコ（子の意）といった』が、「蠶」の俗字として「蚕」が唐代に発生し、「それ以前にあった「蚕」と同型衝突した」と説明している。

諸説を要約すると、漢字としては「蠶（サン）」が、本来は「みみず」を意味する「蚕（テン）」に取って代わられた。日本語では糸を吐く虫を「コ」と呼称していたが、漢字として、旧字体の「蠶」、新字体の「蚕」を当てたということである。ここで留意したい点は、旧字体「蠶」には複数の異体字が認められることである。「死」を「天」とするものや「无」とするもの、それらを並列した下に「日」のあるものと無いもの、「虫」一つのもの二つのもの、「死」の第二画の形状に言及するに至っては数限りない。白川静によると「蠶は象形にかかれているので、その字形によって当時の品種を定めることもできるといふ⁴⁵⁾」のであるが、近現代の出版印刷物を検討する場合、本来の字形の反映かフォントデザインの問題か判別不能である。

筆者は江戸時代の和本に「飼ひ蚕」の表記を確認しており、日本語の読みとしてはいずれの漢字も「こ」であったと考える。養蚕技術の進展に従い、「飼ひ蚕」、即ち家蚕が一般化することにより「蚕」一文字で「カイコ」を意味するようになったと考えるのが妥当ではなかろうか。「お蚕様」を「オコサマ」と呼ぶ地域⁴⁶⁾と「オカイコサマ」と呼ぶ地域が併存することは漢字「蚕」の読み方を考察する上の参考となろう。

尚、カイコガの幼虫は昆虫でありながら家畜である故に「一頭」と数えられ⁴⁷⁾、その長い形状は馬の首に見立てられる。オシラ⁴⁸⁾祭文は馬娘婚姻譚を伝えるといい、カイコと馬との関係は深く、養蚕図など養蚕を題材にした木版画には馬が描き込まれている例が多い。

7-2 モスラ

モスラが架空の存在であればこそ、そのモチーフが如何なるもので、如何様にデフォルメされているのかが問題となろう。小野は「モスラはなぜ蛾なのか」と題した一章を立て⁴⁹⁾、更に「人間に飼育されないと生きていけない生物」と項立てしている⁵⁰⁾。小野の考察に示唆を与えるのは、原作小説内の漁船乗組員の台詞、「でっかいカイコが泳いでいるぞ⁵¹⁾」である。しかし、原作小説内及び脚本の臨時ニュースが告げる政府発表は「形態は、ほぼカイコに似ていて、かつてのゴジラよりもさらに巨大⁵²⁾」と報告している。

小野は原作小説から以下の文章を引用した上で、蛾の種類としてクスサン（樟蚕）やヨナグニサン（与那国蚕）を否定、実際のカイコガとの相違は指摘しつつも、「作者は、たんなる野生の蛾ではなく、カイコガという特定の種類の蛾をイメージしていた⁵³⁾」と言う。小野は終始モスラのモチーフを「カイコガ」であることを前提とし、作品の背後に養蚕のイメージがあると指摘している⁵⁴⁾。

運動を停止して、彼は巨大な口腔の中の絹糸腺と見えるものから絹糸状の糸を吐き始

めた。カイコからサナギへの完全三段階変化が開始された。おどろくべく多量の繊維状のものが吐き出され、糸は国会の塔の両翼にまでかかった。モスラのサナギがついにマユをつくってしまったのだ。⁵⁵

前節に述べたカイコガの実態と比較すると、上記引用文が支離滅裂どころか出鱈目、意味不明たることが明白である。「運動」は「移動」の意と解釈するとしても、「カイコからサナギへ」とは如何なる意味か。作者（堀田善衛）は「幼虫」と「カイコ」を取り違えているのである⁵⁶。また「完全三段階変化が開始」も、卵を「一段階変化」と呼ぶことを是とするならば、幼虫が二段階、蛹が三段階となるが、おそらく「完全変態」するカイコガの「蛹化」の意味であろう。最後の「サナギがついにマユをつくってしまった」も理解不能である。幼虫が繭を作り、繭の中で蛹になるのである。

筆者はモスラと養蚕を結びつける小野の見解に同意するが、小野の「カイコガ説」には同意しかねる。類稀なる裕福な家庭に生まれ⁵⁷、慶應義塾でフランス語を専攻した作者・堀田善衛は「カイコガという特定の種類の蛾」を知らなかったのではないだろうか。脚本第一稿でも泳ぎ来るモスラの姿を蛹と呼んでいることから、脚本家・関沢新一も蚕の品種への拘りがあったとは到底考えにくい⁵⁸。

映画では原作小説にある船員の台詞「でっかいカイコが泳いでいるぞ」は削除されているのであるが、当然ながら蚕は泳げない。従って、「カイコ」とは、蚕のような形態の生物という意味に解釈すべきである。脚本第一稿でも「巨大なカイコのような幼虫⁵⁹」となっている。次に、日本に上陸した幼虫モスラは東京タワーに中央部に括れのある白色の繭をつくり、羽化、赤褐色に黒と赤の紋様のある翅を羽ばたかせニューカークシティへ飛び立つ。従って、当該生物はチョウ目（鱗翅目）の蛾の幼虫ではあるようだが、カイコガには飛翔能力がない。つまり、モスラは飛翔可能であるが故にカイコガたり得ないのである。また、カイコガの成虫はいずれの種類でも白色であり、紋様のある翅を持つものはない。更に映画ではニューカークシティに着陸したモスラの成虫の幼虫時と同様の咀嚼口が映し出されるが、カイコガの成虫に口が無いことは前節に述べた通りである。鱗翅目の中で唯一咀嚼口を持つのはコバネガのグループで、最も原始的な蛾であるという⁶⁰。

7-3 家蚕と野蚕

蚕と呼称される蛾の幼虫は家蚕（カサン）と野蚕（ヤサン）に大別され、前者が今日一般的にカイコと呼ばれるカイコガである⁶¹。家蚕は古代中国で桑子（クワコ）の品種改良の末に誕生したとされ、その過程は未だに解明されていないが、両者とも桑を食し、特に桑子は「桑蚕（ソウサン）」と呼称される⁶²。昆虫学者のデービッド・カーターはカイコガの起源を紀元前 2600 年頃と推定し、その種数を約 300 としているが⁶³、農業・食品産業技術総合研究機構⁶⁴の小瀬川英一は「日本には品種・系統にして 2000 近くの種類が存在して

いる⁶⁵⁾と書いている。いずれにせよカイコガは極度に家畜化された種である。

一方、「野蚕」は野生種の蚕の総称であるが、カイコガ科のクワコガ（桑子蛾）を指す場合もあり、野蚕の成虫は飛翔能力がある。桑子蛾はカイコガと同科で最近種の蛾であり「両者を亜種とすべきとする分類学者の主張もあるものの、学名としては別種扱いが続いている⁶⁶⁾」。

野蚕は天蚕（テンサン）とも呼ばれ、その繭が「山繭」と称されるが、天蚕は日本原産の野蚕の一種である。カイコガの成虫が蚕蛾（カイコガ）であるのに対し天蚕の成虫は「天蚕（ヤママユガ）」或いは「山蚕（ヤママユガ）」と表記される点は注意を要する。つまり、野蚕とは、1) 野生の蚕全般、2) カイコガ科のクワコガ、3) ヤママユガ科のヤママユガを意味するのである。加えて、「山繭」を野生の繭の意味で使用されている場合も認められる。中国に於いては代表的な野蚕は柞蚕（サクサン）であるため⁶⁷⁾、「野蚕」と「柞蚕」と「山蚕・山繭」が同義で使用される場合もある⁶⁸⁾。養蚕業が衰退した今日の日本では蚕自体日常生活で見る機会が少ないが、蚕（家蚕）、桑子、天蚕、三者ともその繭は紡績に用いられてきた。三者とも個体の色、形状、大きさが異なり、それぞれ繭の色、形状、大きさも異なる。

カイコガ（家蚕）は幼虫期孵化後4日目程度までは黒褐色だが、以降は脱皮して多くが白色となる⁶⁹⁾。成虫は白色だがその繭の色は多様で、形状と大きさも品種による変化に富む。一方、クワコガ（桑子）の成虫は灰色で繭は薄い黄色、形は多様で大きさはカイコガに比して非常に小さく、1個の繭からとれる糸の長さにすると5分の1程度となる⁷⁰⁾。ヤママユガ（天蚕）は幼虫期の固体色が緑色で、成虫は黄色から黒褐色まであり、橙黄色が多いとされる⁷¹⁾。繭は緑色である。

木内信によると、「野蚕が利用されている地域はほとんどがアジア⁷²⁾」で、木内は代表的な野蚕として、日本の天蚕、中国の柞蚕、インドのタートルサン、ムガサン、エリサンと共に、近年利用が始まった野蚕としてインドネシアのクリクラサンを挙げている。クワコは北海道から鹿児島県まで、沖縄を除く全都道府県に生息が確認されているが、南限は鹿児島県のトカラ列島悪石島である⁷³⁾。

第6章でモスラの成虫の外観の特徴を8点挙げたが、内7点はヤママユガのメスと一致する。相違点は頭部の色である。デービッド・カーターによると、ヤママユガ科の蛾は「世界中で最も大型で（中略）約1000種が分類されて⁷⁴⁾」おり、皇帝蛾とも呼ばれる。また、同じくヤママユガ科のウスタビガも頭部の色以外類似している。しかしながら、両者共に頭部が白色のものは確認されず、その繭は緑色である。

8 繭から考察するモスラ

モスラの繭は如何なるものであろうか。原作小説では「長円形のマユ⁷⁵⁾」と書かれてお

り、「夜に入ってから、蒼白い、いぶし銀の色⁷⁶」に発光する。しかし、映画では白褐色の繭の中央部に大きなくびれが確認される。くびれのある繭は日本産種の特徴であり、長円形（楕円形）の繭は中国産種の特徴である⁷⁷。長円形の繭イメージは、生産性向上の為に作り出された日中混合種の普及の結果であり、後年のものである。

モスラはインドネシア領に生息する蛾でくびれのある白色の繭を作る蚕（サン）の一種と想定されるが、南洋にそのような繭をつくる種は本研究では確認できなかった。しかし、日本原産種で調査すると、小石丸、鬼縮、桜姫などが確認された。そこで考えるに、長円形からくびれ型への変更は、映画制作段階における純国産への拘り、あるいは日本の養蚕業が最も盛んであった時代への憧憬を示唆するのではないか。このように仮定すると、映像的には最もくびれの目立つ繭を選定するのが至当であろう。

そこで筆者はモスラのモチーフを古代種の蛾と日本純粋種の蛾の合成と推定する。日本純粋種の蛾とは、例えば 1961 年当時急速に減少しつつあった蚕蛾小石丸や天蚕である。両者共に現在も皇居紅葉山御養蚕所で育成され続けている品種である⁷⁸。

筆者は蚕のイメージを基層にしたモスラに原始的なコバネガと伝統文化的なカイコガ、及びヤマユガのイメージを看取する。また、インドネシアの蛾が純日本種の繭から飛び立つところに映画『モスラ』の神話性を認めるところである。即ち、『モスラ』は日本のナショナリズムに立脚したインドネシア共和国誕生の比喩的物語と理解できるのである。

9 モスラの進路

本章については以下の2つの地図を参照されたい。



地図 1. 国土交通省関東地方整備局「宮ヶ瀬ダム」をもとに筆者作成

(参考) <https://www.ktr.mlit.go.jp/sagami/sagami00013.html>



地図 2. モスラの予測針路と推定進路

昭文社 (2017)『なるほど地図帳日本 2018 ニュースと合わせて読みたい日本地図』をもとに筆者作成

9-1 奥多摩湖出現

ゴジラが品川沖に出現し東京湾から上陸したのに対し、モスラの上陸地点は映画では無視されており、突然内陸の小河内貯水池（奥多摩湖、小河内ダム、東京第三ダム、以下、奥多摩湖）に出現したことになる。好井はモスラの進路を「“実証的”に考えても、意味はないのだろう⁷⁹」と言うが、筆者はモスラの進路に多摩地域の特質と都市問題が秘められていると考える。即ち、養蚕と格差である。そこで本節に於いては、上陸から奥多摩湖までのモスラの進路を比定したい。

原作小説では、モスラは夜間神奈川県鎌倉市の七里ヶ浜から上陸、「鎌倉大仏前まで来て⁸⁰」一旦海に戻るが、再上陸、京浜国道を北上する。しかし、映画では三浦半島沖で海没したモスラが突如奥多摩湖に出現、フランキー堺扮する福田善一郎に「どうして奥多摩に」と言わしめる。小野はシナリオ決定稿でのモスラ上陸地点の変更理由を、東京湾からでは『ゴジラ』『大怪獣バラン』の「三番煎じになってしまう⁸¹」点と「奥多摩という内陸からの侵攻⁸²」という意外性に求めている。小野は「奥多摩からの侵攻にはどうしても無理がある⁸³」と書き、「自然主義的リアリズムを超えた理由が考えられる⁸⁴」と述べている。

しかし、映画にも原作小説にも、空間的移動に関する限り、蚕が泳げる事を除けば自然主義的リアリズムを超える事象を示唆する要素は確認できない。幼虫の段階では泳ぐ、這う、成虫となって飛ぶことができるというモスラの身体能力設定は守られている点から考慮し、奥多摩湖出現は、深夜に神奈川県内の海岸から上陸し、多摩地域を北上、都市生活者に気づかれない内に奥多摩湖に達したことを表現していると理解できる。「どうして奥多摩に」の一言は都市生活者のリアリティー、即ち農村の忘却を表現していると言えよう。脚本決定稿では、ジェット機隊の攻撃を受け海没するモスラが「カッ色のモスラの幼虫⁸⁵」と書かれているのに対し奥多摩湖出現場面は「その体はカッ色ではなく、青白く全体に怪光を放っている⁸⁶」と書かれている。つまり、モスラの体色が褐色から白色に変化したことになっており、即ちそれは脱皮を意味するのである。

モスラの多摩地域北上には理由が考えられる。多摩地域は嘗て養蚕業が盛んに行われており、1935（昭和10）年頃を頂点に養蚕業が衰退するものの⁸⁷、多摩地域の中心都市である八王子の繁栄ぶりは桑都と称された程である。桑都、即ち、蚕が餌とする桑が豊富な都なのである。モスラの体色変化の状況描写から、夜間に海中で脱皮した後、奥多摩湖に移動したか、奥多摩湖に移動し、湖内で脱皮したかのいずれかが考えうる⁸⁸。上陸から宮瀬までの間に脱皮が確認されていない故に、前者の場合、上陸時点で既に5齢、後者の場合は奥多摩湖までが4齢、奥多摩湖から東京タワーまでの東進中が5齢となるが、脱皮直前は眠状態であり動作が最大2日程度停止するため、後者は考えにくい。映画では体色の変化が確認できず、また変化を示唆する会話も無い。従って、日本に上陸したモスラは5齢の幼虫と考えるのが合理的である。5齢は蚕が最も桑葉を摂食する時期である。

モスラは本能に従い直線移動しており、原作小説に従う場合、七里ヶ浜、鎌倉大仏前を

結ぶ線の延長線上に小美人が、延長線上反対方向にインファント島が存在することが合理的に導き出せる。しかし、地図により検証すると、七里ヶ浜東端の稲村ヶ崎と鎌倉大仏の南端を結んだ線（地図 1）の延長線は現在の東京税関大井の北、みなとが丘ふ頭公園あたりを通り東京湾に抜け、りんかい線の国際展示場駅を通り、総武本線の新小岩駅付近を経て松戸方面へ抜ける（地図 2、線 A-A'）。今日では臨海地区と称される埋立地域は、1961 年当時はその大部分が東京湾上となり、線は都心を外れる。線は大田区内で第一京浜（国道 15 号）と並行し、原作小説の「京浜国道⁸⁹」と符合するのだが、小美人がいる中央劇場が日比谷公会堂であることが最終稿の柱に明記されており⁹⁰、線は目的地から東に約 3.1km ずれている。一方、反対方向遥か延長線上にはフィリピン諸島がある。

一方、映画に従う場合、モスラの進行予想直線は三浦市三崎と横須賀中央を通り一旦東京湾に出る（地図 1）。羽田を経て再び東京湾を渡り臨海地区から深川、森下、本所を通り足立方面へ抜ける（地図 2、線 B-B'）。この予想線も千代田区所在の日比谷公会堂から東へ約 2.3km 外れている。反対方向、南への延長線も東へずれることとなり、フィリピンを経ることなくインドネシアに至る。

モスラが多摩方面へ向かった設定に合理的解釈を付与するなら、モスラを呼ぶ小美人のテレパシーが何らかの事情により途切れた状態にあったと言えよう。自由行動中の巨大生物が南方向から北方向へ上陸する場合、東京湾口は三浦半島が立ち塞がる形となり、狭小な浦賀水道へ回り込むより、逗子から小田原近辺までの相模湾の海岸を上陸地点とするのが妥当だろう。そこで、相模湾から奥多摩湖に至るモスラの進路を検討したい。

原作小説に従いモスラが一旦海中に消えたとするにせよ、1 回の上陸で奥多摩湖に侵入したとするにせよ、気づかれずに内陸に到達する恰好の侵入路は相模川である（地図 1）。河原の桑は養蚕に最良とされ⁹¹、大河川の河原には桑畑が広がっていたのである。相模川はその河口付近を馬入川ともいい、7 章 1 節で述べたよう蚕の幼虫を馬に見立てるならば、正にモスラが入るべき川である。相模湾から相模川を約 15km 遡上すると、西から小鮎川、北北西から中津川が合流する。現在も広大な河川敷が広がっており、国土交通省厚木無線中継局の塔が目印になる地点である。国土地理院発行の地形図によると、昭和 30 年代(1955～1964)、この付近より北方はまだ桑畑が広がっていた。更に流れは相模線下溝駅付近から上流は北西へ伸び、両岸河川敷に沿い桑畑が広がっていた。桑畑は山地が右岸（西岸）に迫る小沢から大和にかけて減少するが、左岸（東岸）の相模原一帯には桑畑が広がっていたようである⁹²。北西正面は桑畑の無い山地（現、相模原市緑区若葉台）に進路を阻まれ、モスラ直進の合理性は低い。従って、モスラは北東の原宿、森下（現、相模原市緑区相原）方面か、川を遡上し西方へ進むことになるだろう。いずれの方向も桑畑が広がっていたと思われるが、相模川を遡上することによる桑畑の増加を学習したモスラは、西方へ相模川を遡上すると考えたい。今日圏央道が走る城山 1～4 丁目一帯は、ほぼ全域桑畑だったようである。更に遡上すると、今日では津久井湖となっているが、城山ダム完成の 1965（昭

和 40) 年以前は、谷底の流れに沿い桑畑が伸びていたのである。谷間に迷い込んだモスラは、桑を求め相模川を遡上すれば、インフラ破壊を最小限に留め相模ダム（相模湖）を経て、山梨県の上野原近辺まで到達可能であろう。相模ダムは 1947（昭和 22）年に完成しており、県境を境に相模川は桂川と名称を変えるが、上野原駅南西約 750m まで湖の観を呈し、山梨県側では島田湖と呼称されている。島田湖から更に西へ桂川を遡上すれば大月を経て山梨市へ至るが、桂川の島田湖流入部は狭く、北からの鶴川流入部が広い。そこで相模川を北上してきたモスラは北の鶴川を進路に選択すると考えたい（地図 1）。上野原から鶴川沿いの谷すじ（現、山梨県道 18 号線沿い）を小菅村方面へ登れば、小菅川・国道 139 号線沿いに東へ転進し小河内ダムのある奥多摩湖に出る。河川と谷間を進むこのルートが地形的には最も無理が無いが、狭い谷沿いには小集落が点在しており、人的被害は免れまい。

幼虫モスラは 5 齢と考えられ、最も飼料を必要とする時期である。遙か南洋から泳いできたモスラが、桑葉を求め相模川を遡上し、多摩地域を這い回った末に奥多摩湖に出現するのは本能的行動の帰結と理解しうるのではなかろうか。さもなくば小美人が捉えられている東京都心の日比谷公会堂へ直行しない理由が見当たらない。都市住民が眠りに就いている間に、モスラの進路となった地域は被災していると想定され、作品はその事実気づかない都市生活者の奢りを暗示しているのではないだろうか。筆者はモスラの奥多摩湖への「突然の出現」の裏に多摩地域の蹂躪が隠されていると考える。

奥多摩湖までのルートは筆者の想像に過ぎないが、自然主義的リアリズムに従えば、モスラは餌となる桑を求めて成長しつつ夜間に谷間に迷い込んだ挙げ句、奥多摩湖に至ったと考えるのが妥当であろう。また、次節「東進」は筆者の想像ではなく、作品に明示された進路であるが、青梅街道の実写シーンでは街道を逃げ惑う人々の背景に桑畑が映っており⁹³、蚕の生態と地勢を根拠にした本節の推定には理が認められるのではないだろうか。

9-2 東進

奥多摩湖に出現したモスラは意図せずもその巨体でダムを破壊した後都心を目指して東進する。ダム破壊に続く東進による都市破壊は特撮映画の見せ場である。山梨県境に近い奥多摩から巨大生物が東へ進む設定は、都心へ確実に迫る恐怖を演出しているのだが、その背景にも都心と地方の格差が横たわっているのではなかろうか。戦後の復興に沸く都市生活者にとり多摩地域の桑畑などさして重要ではないだろう。映画では、モスラは小河内ダム破壊後行方不明になる。一瞬映し出される新聞記事は「ダム破壊後姿消す」の大見出しが目を引き「流失四十三戸 行方不明」以下は殆ど見えない。よく見ると、本文は架空の村の流失戸数 43 戸、重傷者数 38 人ほか被害 930 人を伝えているが、映像を止めない限り読むのは困難であろう。姿を消したモスラの再出現を伝えるのは香川京子演じる日東新聞写真部花村ミチの言葉－「大変よ。モスラが横田基地に現れたのよ」－である⁹⁴。小河

内ダムから横田基地までのモスラの進路を考えると、多摩川を下り羽村町（現、羽村市）に至り福生町（現、福生市）までのいずれかの地点で左岸に上がったと考えて良いだろう。前出の被害状況と合わせ控えめに見積もっても被害1000人は下らないのではなかろうか。しかし、モスラが横田基地に至るまでの地方都市の被害は都心部の生活者の想像外なのである。

小野はモスラの進路を小河内ダムから東京タワーまで直進とし、その途上にある米軍「横田基地を破壊しながら進む場面⁹⁵」に注目しているが、蚕の幼虫の太陽に向かい直進する特性を踏まえると、モスラに横田基地を破壊させるには小河内ダムが出発地点として適地である。当然として、横田基地破壊設定の背景には安保闘争と戦後ナショナリズムが看取できる。

横田基地を破壊したモスラは青梅沿いに東進する。荻窪付近から針路をやや南にとるが、旧青梅街道上を進んでいると理解できる。この設定も中央重点主義に基づき都心までの距離、即ち破壊の進度をわかりやすく表現していると言えよう。

モスラの進路について、小野は「現実世界を意識して『聖なる土地』を荒らさないように配慮⁹⁶」されていると指摘し、「皇居はむろんだし、明治神宮を横切ることもしない（中略）原宿は看過される⁹⁷」と書いている。小野の指摘は、直進ルートが如何に設定されているか、という問題である。荻窪から東京タワーまで直線を引くと、明治神宮本殿・拝殿は避けられるものの、明治神宮御苑、参道、原宿駅北端を横切る（地図2、荻窪-D'）。しかし、映画のように渋谷に出現させれば、荻窪、渋谷を結ぶ直線は、荻窪・東京タワー線の10度南に角度をとり、代々木公園の南西の富ヶ谷を抜けることとなる（地図2、荻窪-D'荻窪-C'）。

モスラが都心を目指し進行している時、興行師ネルソンは小美人を連れロリシカ（原作小説ではロシリカ）国に脱出してしまう。そこで、モスラは東京タワーに営繭、羽化し、ロリシカ国のニューカークシティ（原作小説ではニューワゴンシティ）へ飛び立つのである。東京タワーの所在地は渋谷の真東に当たり、当時の都心最高の建築物に営繭するという映画の設定は、国会議事堂に営繭するという原作小説より合理的である。また、荻窪から日比谷公会堂へ直線を引くと、新宿御苑を掠め明治天皇の聖徳を讃える聖徳記念絵画館（神宮外苑）と赤坂御用地を貫き、国会議事堂を経て日比谷公会堂に至るのである（地図2、荻窪-日比谷公会堂）。つまり、荻窪からは東京タワーも国会議事堂も日比谷公会堂も、モスラの目標として不適切なのである。一旦渋谷に向かわせた上で東京タワーに営繭させるという脚本は、前述の厄介な問題を蚕の特性により解決しているのである（地図2、赤太線）。結論をやや先取りすると、小野の言う「自然主義的リアリズムを超えた理由⁹⁸」の核心は文化ナショナリズムの聖地の回避なのである。

10 近代産業と「ご養蚕」

皇居は勿論、明治神宮、原宿駅が避けられるべき理由は、近代皇室及び養蚕との関わりである。皇居に於いては、明治天皇の後美子（よしこ、後の昭憲皇太后）が1871年、「吹上御苑内の茶室を蚕室として、自らご養蚕を始められ⁹⁹」、現在では日本純粋種である小石丸、日中交雑種である白繭種、欧中交雑種である黄繭種、日本原産の野蚕である天蚕（山繭）が飼育されている¹⁰⁰。明治神宮には近代日本の創業者たる明治天皇が祀られ、原宿駅には大正天皇の為に建設された皇室専用ホームがある。大正天皇の後「貞明皇后は、幼い頃にお育ちになった武蔵野の農家で養蚕に興味を持たれ、女学校時代にはその農家から蚕をお貰いになって飼育された（中略）ためか、ことのほかご養蚕にはご熱心であった¹⁰¹」のである。

『古事記』に登場する大宜都比売神（おおげつひめのかみ）は五穀や養蚕を司る神とされ、また、皇祖・天照大御神の機織りが建国神話に取り入れられている事実は、それが国家にとり重要であったからに他ならず、皇室が今日まで継承してきている一少なくともそのように喧伝する一ことは、「天壤無窮」の皇室の正当性の主張として、或いは国家統治の方法として、理に適っているのではなかろうか。実際、明治政府は皇室を巧みに利用し国家運営に当たっている。明治国家の指導者層にとり、年若い明治天皇は教育対象であり、皇室自体が国家統治に必要な権威に過ぎなかった。近代皇室と養蚕の関係の積極的宣伝も殖産興業推進の旗振り役として利用されたのである。

明治政府が養蚕を国策と位置付けるに至るには、幕末以来の国内的、国際的、双方の要因がある。まず、国内的には、外貨の支払いに当ててきた金銀の産出量の低下が指摘される。銀の世界産出量の三分の一を占めたとされる石見銀山も江戸時代初期から衰退し、明治期には枯渇状態となる¹⁰²。国内最高の金産出量を誇った佐渡鉱山は江戸時代中期から衰退、皇室財産となり1896年に三菱合資会社に払い下げられ、最盛期の産出量、年間400トン超まで回復するのは明治後期である¹⁰³。

一方、国際的には、欧州、殊にフランスに於ける養蚕事情が指摘される。1850年から1860年代にかけて「フランスにおける養蚕業は原因不明のカイコの病気のため、未曾有の危機に陥っていた¹⁰⁴」。竹田敏によると、1864年、イギリスと世界市場で争っていたフランスの公使ロッシュの画策が徳川幕府とフランスを提携させる。フランスの援助による横須賀製鉄所の建設計画のため、ロッシュに借款を申し出た幕府に対し、「ロッシュは、いくつかの交換条件として生糸を現物として納め、外国へ直接輸出する方法があることを教え¹⁰⁵」、1865年には徳川幕府が15,000枚の「蚕種をフランス皇帝ナポレオン三世に献上している¹⁰⁶」のである。

政権が徳川幕府から明治政府に代わり、フランスとの関係は軍事、外交を通じ一層緊密化し、日本の近代化を前進させたのであるが、そこで殖産興業の支柱として、養蚕・製糸

業が国家的に推進されたのである。ロッシュの幕府への教唆が明治政府により現実化したと言える。

ここで注目したい点は、養蚕業の精神性とその国家主義的ナショナリズムへの統合である。養蚕が日本創世記である『古事記』や『日本書紀』の神話に登場する事実は、土着神である国津神に対する外来神たる天津神系の祭祀、即ち日本列島に「天下った」勢力である朝廷との関係を十分に示唆するだろう。加えて、全国に見られる養蚕信仰は神社神道のみならず、蚕室の壁などに貼る護符(写真2)の配布等が仏教寺院を通して行われた。

養蚕は、温度や湿度の管理に細心の注意を払い、蚕を病気や害獣・害虫から守らねばならないのみならず、桑の管理も行う必要がある。失敗すれば大量の蚕が死滅する一方、無事集繭できれば農家にとっては貴重な現金収入となる。従って、日々の生活に組み込まれた養蚕が民間信仰と密接に結び付くことは容易に想像されよう。稚産神(わくむすびのかみ)や金色姫をはじめとした養蚕に関係する神々¹⁰⁷(以下、養蚕神と総称)が神像や図画として民間に伝承している。養蚕神の図が神棚の他、蚕室に掲げられている様子が浮世絵にもよく描かれており、同図の広範な普及を示唆している。

「建国以来」の歴史を有する日本の養蚕は、江戸時代の浮世絵の題材としても広く描かれたのであるが、明治以降も引き続き錦絵に描かれる。そこで明治天皇と養蚕が融合するのである。長谷川竹葉「宮中養蠶之圖」に明治天皇・同妃が描かれたのを始め、錦絵や挿絵を通し「ご養蚕」が広く庶民に認知されることとなったのである。東京工業大学所蔵、竹葉の「宮中養蠶之圖」は、2014年宮内庁編文化庁発行の『Exposition KAIKO』に画像引用されており、皇室が同図を重要視していることを示唆している(写真1)。しかし、「ご養蚕」は庶民に認知されるに止まらず、更に国家的統合を促進する効果があったと考える。

1873(明治6)年11月に設置された内務省は内政の中心行政官庁として粗悪な蚕種生産を取り締まったが、教部省廃止の1877(明治10)年以降は同省に代わり神社行政も所管した。1885(明治18)年には省内に社寺(のち宗教)局が設置された。1913(大正2)年、内務省宗教局が廃止され、宗教行政の所管は文部省宗教局に移ったものの、内務省の警察力は昭和の敗戦まで宗教全般、社会全般に強い影響を与え続けた¹⁰⁸。養蚕農家が求めた護符には内務省御届済の押印がされているものが確認されるのだが(写真2、3)、これはいわば、産業と宗教が内務省の権威の下に統合されていると言える。「届出済」ではなく「御届済」である点が護符発行者側から内務省の権威への接近を窺わせるが、同時に国家権威の「お墨付き」が購入者受けしていた左証とも言える。多様な形態の養蚕信仰が国家の統制下に置かれ、生業を通し国民精神の近代天皇の下への統合が企図されていたのである。明治天皇后により始められた「ご養蚕」により、御養蚕室はいわば近代産業の聖地となったのである¹⁰⁹。

しかし、「ご養蚕」は象徴的事業に止まらず、近代以降、歴代皇后に引き継がれること

により皇室の伝統となったことは明白であり、美智子上皇后御親蚕の小石丸が正倉院宝物の復元に使用され¹¹⁰、「まさに皇室文化、日本文化の継承そのもの¹¹¹」となっている。皇后御親蚕による宝物復元、ここに神話が重ねられた訳である。皇室ジャーナリスト・久能靖はその著書に「御親蚕－歴代の皇后による養蚕¹¹²」、「歴代の皇后によって受け継がれてきた御養蚕¹¹³」と紹介、『日本書紀』を根拠に450年頃雄略天皇の后が「ご養蚕」を始めたと言き、「その後（中略）中断され、復活したのは明治四年¹¹⁴」と書いている。つまり、近代以降の伝統ではなく、あくまでも「復活」と言う。こうして物語は紡がれ、不動の神話になってゆくのである。



写真1. 『Exposition KAIKO』に画像引用された「宮中養蠶之圖」（右上）

宮内庁編 (2014) 『Exposition KAIKO』文化庁 筆者撮影



写真 2. 蚕守護符（全体）筆者所蔵・撮影

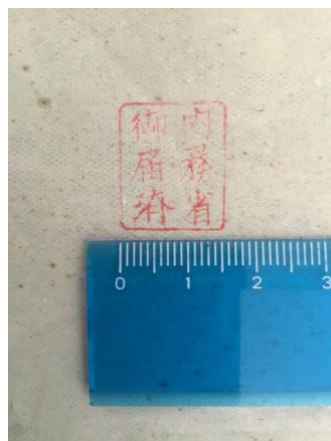


写真 3. 蚕守護符（部分） 筆者所蔵・撮影

11 結論

本稿に述べてきた通り、1961 年公開の映画『モスラ』の、モスラ自らは攻撃をせず、攻撃を受けても反撃すらしめない徹底した非戦思想は、日本の平和主義の基層を建国神話に求め、米国の核戦略下の「平和」に対する批判精神に溢れた文化ナショナリズムと言える。

『ゴジラ』の原子力と水爆実験に対する批判に続き、平和主義を主題に据えた『モスラ』は、神話の持つ甘美な理想主義をインドネシアを通した南洋イメージと結びつけることにより具象化しようとする欲求と共に、戦後の復興気運に基づくある種の健全な反米思想と反核思想を表象しているのである。

蛾が日本文化に於いて重要な生物であったにも関わらず、戦後の日常生活からは遠ざけられるものとなっていく。伝統的なものが日常生活から消え、関わらざるべきものになったのである。一方、人間が本来関わらざるべき核が軽薄にも日本社会に受け入れられつつあったのである。堀田善衛は以下のように書いている。

現代ではどんなに重大な事件でも、直ちに芸能化されることを避けがたい。原子爆弾から名をとったアトミック・ガールズなるラインダンスが、アレイナたちの合唱のあいだつなぎをする世の中である。¹¹⁵

『モスラ』は養蚕のイメージを通し容易に伝統を捨てようとする戦後の風潮と新しいものに対する軽薄な礼賛、米国の原子力政策を受け入れる楽観的風潮への批判を表現していると理解できる。好井裕之は『モスラ』をファンタジー映画と評し「原水爆イメージは、被曝のファンタジーの中で（中略）色褪せていき、反原水爆という批判的な意味合いもまた色褪せていく¹¹⁶」と批判するが、筆者は寧ろ建国 185 年の米国が創造した原子力神話に対する 2600 年を超える神話文化ナショナリズム映画ーと評したい¹¹⁷。

2011年の福島原発事故を受けて製作された映画『シン・ゴジラ』のゴジラは、東京で凍結されたままの状態である。それは、未だに解決されない原子力発電所の存在のみならず、ゴジラ氷解の可能性、即ち核の暴走をも表象しているのである。

皇居紅葉山では今日も変わらず昔ながらの技法により養蚕が続けられている。映画公開から60年以上経過した今日、高度経済成長期の入り口に立った当時の日本人が経済的繁栄の代償を如何に考えたのか、当時の理想を再確認するのみならず、歴史、文学、国際関係など、『モスラ』は多様な視角から鑑賞する事が出来る作品である。

12 おわりに

2021-2022年度もコロナ禍の中で新学期を迎えた。1～2学期には教職員が持ち回りで「談話テーブル」を担当し、筆者は多摩地域の井戸と養蚕信仰を題材とした。このような状況下で、筆者が日本研究者を対象とした日本語学習教材の模索を始めたのが2019年である。

2020年度は井戸研究の成果をまとめたのであるが、奇しくも本研究に当たり文献を調査していたところ、欧州の養蚕に多大なる影響を与えたレオン・ロニの奇著『養蚕新説』の序説に「日本語学習者のための教科書的なものとして著した¹¹⁸⁾」と書かれている事実を知り喫驚した次第である。幕末から明治期の最先端技術書をフランスの言語学者ロニは外国語(日本語)学に導入しようと試みたのである。日本語教科書としての同書の成果は不明だが、日本の伝統文化並びにその継承の最先端事情と日本語学習を融合させることを是とするならば、「ご養蚕」は最良のテキストの一つとなろう。本稿は研究論文という性格上、皇室に対しても持論においては待遇表現¹¹⁹⁾を避けつつも、教材利用を念頭に置き、引用の形で使用した。

注

- 1 監督：本多猪四郎、特技監督：円谷英二、制作：田中友幸、制作・配給：東宝株式会社。
- 2 監督・特技監督：樋口真嗣、准監督・特技総括：尾上克郎、脚本・編集・総監督：庵野秀明、制作・配給：東宝。
- 3 1964年公開の『三大怪獣 地球最大の決戦』ではゴジラ、モスラ、ラドンが「三大怪獣」。作品毎に3位評価に差異があるものの、1位ゴジラ、2位モスラは不動である。
- 4 1961年公開の『モスラ』以降、モスラが登場する映画は13作あるが、本稿の主題であるナショナリズムの観点から、思想性の高い第1作に焦点を当てる。
- 5 佐藤健志(1992)『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』文藝春秋所収。「ゴジラはな

- ぜ日本を襲うのか」初出は『諸君！』文藝春秋 1992 年 2 月号。
- 6 小野俊太郎 (2007)『モスラの精神史』講談社
 - 7 好井裕之 (2007)『ゴジラ・モスラ・原水爆－特撮映画の社会学』せりか書房
 - 8 赤道以北である南洋群島（マリアナ諸島、バラオ諸島、カロリン諸島、マーシャル諸島）に地域を限定するものではなく、赤道以南も含めた広範な南洋イメージで、冒険、楽園、玉碎のイメージが併存する。（参考）加藤聖文 (2007)『「大日本帝国」の崩壊－東アジアの 1945 年』中央公論新社
 - 9 上、中、下の 3 部構成で、「（上）草原に小美人の美しい歌声」p.3-20 が中村真一郎、「（中）四人の小妖精見世物となる」p.21-41 が福永武彦、「（下）モスラついに東京湾に入る」p.42-82 が堀田善衛作である。
 - 10 中村真一郎・福永武彦・堀田善衛 (1994)『発光妖精とモスラ』p.47
 - 11 「尼」は印度尼西亜（インドネシア）。
 - 12 スカルノと日本の密接な関係は 1942 年 2 月に始まる。日本軍、スカルノ、双方が必要としていた。（参考）信夫清三郎 (1988)『「太平洋戦争」と「もう一つの太平洋戦争」－第二次大戦における日本と東南アジア』勁草書房 p.225。また、当時第 16 軍司令官兼蘭印総督だった今村均の回顧録に具体的会話が記されている。（参考）今村均 (1966)『幽囚回顧録』秋田書店 p.259-271
 - 13 1992 年公開、所謂「平成モスラ」、シリーズ第 19 作。監督：大河原孝雄、特撮：川北宏一、脚本：大森一樹、制作総指揮：田中友幸、制作：東宝映画。
 - 14 洋泉社編 (2011)『別冊映画秘宝 モスラ映画大全』洋泉社 p.119 に写真あり。
 - 15 好井裕之 (2007)『ゴジラ・モスラ・原水爆－特撮映画の社会学』せりか書房 p.136
 - 16 同上
 - 17 中村・福永・堀田前掲書 p.27-29
 - 18 当該シーンはカットされている。関沢新一「シナリオ モスラ 決定稿」『発光妖精とモスラ』p.129
 - 19 中村・福永・堀田前掲書 p.27
 - 20 中村・福永・堀田前掲書 p.29
 - 21 布目順郎 (1979)『養蚕の起源と古代絹』雄山閣 p.18
 - 22 （参考）横山岳 (2020)「日本とカイコ」『カイコの科学』日本蚕糸学会編、朝倉書店 p.7
 - 23 石川道博編訳 (1985)『新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』p.46 、（原文）p.109
 - 24 柳田國男の実弟、松岡静雄[1878-1963]による調査、著述や、柳田自身の国際聯名常設委任統治委員会の委員就任（1921 大正 10 年）など。
 - 25 大室政右 (1996)『秘境ボルネオ戦記－生き残り海軍民生要員の手記』総和社 p.5

- 26 (参考) 大室前掲書 p.242-243。また、インドネシア南東部のカイ諸島、セレベス島ミナハッサ、パラオ島、ニューブリテン島には失われた釣り針をめぐる兄弟喧嘩、即ち日本神話の海幸彦山幸彦に酷似した神話があり、失われた釣り針型説話の源流はインドネシア方面と考えられている。(参考) 上田正昭 (2003)『新修 日本の神話を考える』小学館 p.210、大林太良監修、榎朝子訳、クラブス本文作成、ニール・フィリップス文 (2017)『世界の神話と伝説－神々と英雄』小学館 p.42-43、大林太良・吉田敦彦監修 (1997)『日本神話事典』大和書房 p.71-73
- 27 飛鳥音久 (1977)「日本神話を生んだボルネオ」『戦時回想録』南ボルネオ会編、南ボルネオ会 p.409
- 28 同上
- 29 同上
- 30 東南アジアとフィリピン方面を指し、1942 年海軍民政府が設置された。
- 31 (参考) 奥宮正武 (1996)『日本海軍が敗れた日 (下)』p.211-223
- 32 東京大学文学部教授
- 33 永積昭 (1977)『東南アジアの歴史－新書東洋史⑦』講談社 p.193
- 34 洋泉社編前掲書 p.69 に撮影用スケール比較図写真あり。
- 35 ハエ類、カ類、ゴキブリ類は衛生害虫に分類される。
- 36 (参考) 上山直英 (2017)「日本における殺虫剤産業の発祥と発展」『科学と工業』大阪工研協会、p.590-592
- 37 KINCHO「会社案内」<https://www.kincho.co.jp/kaisha/scenel/index.html> (2022.5.1)
- 38 KINCHO「ウルトラ害虫大百科」<https://www.kincho.co.jp/gaichu/index.html> (2022.5.1)
- 39 (参考) 伴野豊 (2020)「カイコの生き物としての特色と起源」『カイコの科学』日本蚕糸学会編、朝倉書店 p.2
- 40 品種により、4 眠蚕と 5 眠蚕がある。
- 41 弱アルカリ性の液体酵素、プロアテーゼやコクナーゼ。
- 42 (参考) 山崎泰正・小川克明・金勝廉介 (1992)「カイコガコクナーゼの高速液体クロマトグラフィーによる分離とその作用特異性」『日本蚕糸学雑誌』61 (3)、日本蚕糸学会 pp.228-235
- 43 新井小枝子 (2017)「〈蚕〉を表す語彙－造語法と方言分布」『地域政策研究』高崎経済大学地域政策学会 19 (4)、p29
- 44 新井前掲論文
- 45 白川静 (1996)『字通』平凡社 p.619
- 46 岩手県南部から宮城、山形、福島北部にかけて、栃木、茨城、群馬、埼玉、東京、神奈川に分布。(参考) 新井小枝子 (2017)「〈蚕〉を表す語彙－造語法と方言分布」『地

- 域政策研究』高崎経済大学地域政策学会 19 (4)、pp.23-42
- 47 昆虫学ではいかなる昆虫も伝統的に「一頭」と数える。
- 48 柳田國男はオシラサマを養蚕神とし、旧来のオシラ信仰が後発の養蚕信仰を習合したと見られる旨を述べているが、石上堅は家の神とし、三崎一夫は特性不明としている。
(参考) 柳田國男 (1951)「大白神考」『柳田國男全集第十九卷』筑摩書房 pp.59-184
石上堅 (1983)『日本民俗大辞典』桜楓社 p.259-260、福田アジオ他編 (1999)『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館 p.257
- 49 小野前掲書 p.30
- 50 同上
- 51 小野前掲書 p.30、中村・福永・堀田前掲書 p.43
- 52 筆者下線。中村・福永・堀田前掲書 p.57、関沢新一「シナリオ モスラ 第一稿」『発光妖精とモスラ』p.115
- 53 筆者下線。小野前掲書 p.30
- 54 同上
- 55 小野前掲書 p.30、中村・福永・堀田前掲書 p.67-74
- 56 カイコガの幼虫を「カイコ」と呼称する一般例はあるが、当該引用文においてその理解は不適切と思われる。
- 57 父は富山県会議長の堀田勝文、母は同県初の保育所創設者堀田くに、生家は廻船問屋であった。
- 58 映画では意味不明な会話が削除され、モスラも蚕らしく動いている。養蚕が隆盛であった福島県須賀川町出身の特技監督・円谷英二の影響ではなかろうか。
- 59 筆者下線。関沢前掲第一稿 p.111
- 60 (参考) 梅原献上二 (1986)『虫の民俗誌』築地書館 p.44
- 61 大日本蚕糸会は「蚕のなかま」としてカイコガ科 4 種、ヤママユガ科として 12 種を挙げると共に、チャチホコガ上科のカレハガ科 2 種と同ギョウレツケムシ科の 1 種を挙げている分布図を紹介している。ヒトリガ科のシロカサンはカイコガ科のカイコガと似ているが、体長がやや小さく、飛翔能力を有す。
- 62 家蚕を「桑蚕」と書いた時期もあるという。(参考) 王元紘著・伊藤智夫・深田哲夫訳 (1999)『野蚕録』法政大学 p.90-91
- 63 デービッド・カーター (1996)『蝶と蛾の写真図鑑』日本ヴォーグ社 p.214
- 64 国立研究開発法人・農業食品産業技術総合研究機構、通称農研機構。
- 65 小瀬川英一 (2020)「多様なカイコの種類」『カイコの科学』日本蚕糸学会編、朝倉書店 p.14
- 66 伴野豊 (2020)「カイコの生き物としての特色と起源」『カイコの科学』日本蚕糸学会編、朝倉書店 p.3

- 67 (参考) 王元縦前掲書
- 68 (参考) 厚木市郷土資料館編 (2004)『第七回特別展示 養蚕書と出版文化－養蚕文化はどう伝わったのか』厚木市教育委員会 p.35
- 69 一般的にカイコガの幼虫は白色と認識されているが、日本では 300 種類に及ぶ変異体が維持されており、内 100 種類以上が体色に関わる変異体である。(参考) 二橋亮・二橋美瑞子「カイコの多様な形質」『カイコの科学』日本蚕糸学会編、朝倉書店 p.51
- 70 (参考) 伴野前掲稿 p.3
- 71 (参考) Silk New Wave
<https://www.naro.affrc.go.jp/archive/nias/silkwave/hiroba/Library/tensan/tensan.htm> (2021.11.23)
- 72 木内信 (2011)「野蚕特集にあたって」農林水産省農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター『蚕糸・昆虫バイオテック』79 (3)、p.149
- 73 (参考) 河本夏雄他 (2019)「日本におけるクワコの生息地域－フェロモントラップを用いた調査」農林水産省農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター『蚕糸・昆虫バイオテック』88 (1)、p.53
- 74 デービッド・カーター前掲書 p.218
- 75 中村・福永・堀田前掲書 p.74
- 76 同上
- 77 (参考) 小瀬川前掲稿 p.14
- 78 紅葉山御養蚕所の家蚕は 3 品種。注 100 参照。
- 79 好井前掲書 p.133
- 80 中村・福永・堀田前掲書 p.66
- 81 小野前掲書 p.160
- 82 同上
- 83 同上
- 84 同上
- 85 関沢新一「シナリオ モスラ決定稿」『発光妖精とモスラ』p.153
- 86 筆者下線。関沢前掲決定稿 p.156
- 87 東京の蚕糸業は 1930 (昭和 5) 年に産繭量で最大のピークに達し、1941 (昭和 16) 年以降第二次世界大戦の為に統制下に置かれ、養蚕業は急激に衰退、1945 (昭和 20) 年、終戦により幾分回復するも 1957 (昭和 32) 年をピークに衰退する。1930 年の日本の産繭量も過去最高の約 40 万 t で、養蚕農家数 220 万戸、全農家の約 4 割が養蚕を行っていた。(参考) 横山前掲稿
- 88 第一稿ではモスラが葉山海岸沖の海面に出現した際、「幼虫から蛹に姿を変えている」

- と書かれているが、原作小説、最終稿共にその記述は無い。蛹は動かないので、第一稿の記述は非合理的である。
- 89 中村・福永・堀田前掲書 p.67
- 90 関沢前掲決定稿 p.154
- 91 河原の桑には蠅の産卵が少ないため、蚕に蠶蛆病が発生しにくい。
- 92 1965 年頃から相模原市相模川左岸は急激に都市化が進んでいる。(参考) 安藤康行 (2013)「旧版地形図から見る相模原の変遷」北里大学一般紀要 18 pp.117-131
- 93 青梅街道実写シーンの実際の撮影場所は不明である。
- 94 脚本決定稿は「モスラが横田基地に現れたんです」。
- 95 小野前掲書 p.172
- 96 小野前掲書 p.163
- 97 同上
- 98 小野前掲書 p.160
- 99 皇室で行われる養蚕を「ご養蚕」といい、宮内庁も一般語の「養蚕」と区別して使用している。宮内庁編 (2014)『Exposition KAIKO』文化庁 p.17
- 100 (参考) 宮内庁前掲書 p.54 他
- 101 貞明皇后は、1947 年に大日本蚕糸会総裁に就任している。宮内庁前掲書 p.17
- 102 (参考) しまね観光ナビ HP、石見銀山、
<https://www.kankou-shimane.com/mag/ginzan/948.html> (2021.11.23)
- 103 (参考) 三菱マテリアル HP、MMC Magagine、
<http://carbide.mmc.co.jp/magazine/article/vol02/sado> (2021.11.23)
- 104 竹田敏 (2016)『幕末に海を渡った養蚕書』東海大学出版部 p.iv
- 105 前掲書 p.42
- 106 前掲書 p.59
- 107 柳田國男『遠野物語』により広く知られるオシラサマについては敢えて踏み込まない。畑中明宏「オシラサマ考」が詳細を論じている。
- 108 内務省は 1947 年廃止となる。
- 109 「聖地」の語は、扶桑社編集部が「日本の絹の聖地・紅葉山御養蚕所」として使用している。扶桑社 (2004)『皇后陛下古希記念皇后さまの御親蚕 皇后さまの育てられた蚕が正倉院宝物をよみがえらせた』扶桑社 p.21
- 110 宮内庁正倉院事務所によると、1994 年より 10 か年にわたり毎年 40Kg 以上の小石丸生繭の御下賜がある。(参考) 扶桑社前掲書 p.213
- 111 扶桑社前掲書 p.134
- 112 久能靖(2010)『知られざる皇室 伝統行事から宮内庁の仕事まで』河出書房新社 p.163
- 113 同上

- 114 同上
- 115 堀田善衛「モスラついに東京湾に入る」p.48
- 116 好井前掲書 p.140
- 117 1776年の米国独立宣言は1961年の時点で建国185年、同年は皇紀2621年にあたる。
- 118 竹田前掲書 p.75
- 119 日本研究センターにおいては尊敬語、謙譲語、丁寧語、及びカジュアル、フォーマル等の使い分けを「待遇表現」と呼称している。

参考文献

著書・著述

- 厚木市郷土資料館 (2004)『第七回特別展示 養蚕書と出版文化－養蚕文化はどう伝わったのか』厚木市教育委員会
- 新井小枝子 (2017)「〈蚕〉を表す語彙－造語法と方言分布」『地域政策研究』高崎経済大学地域政策学会 19 (4)、pp.23-42
- 今村均 (1966)『幽囚回顧録』秋田書店
- 上田正昭 (2003)『新修 日本の神話を考える』小学館
- 梅谷献二 (1986)『虫の民俗誌』築地書館
- 王元縦著・伊藤智夫・深田哲夫訳 (1999)『野蚕録』法政大学
- 大林太良監修、楨朝子訳、クラップス本文作成、ニール・フィリップス文 (2017)『世界の神話と伝説－神々と英雄』小学館
- 大室政右 (1996)『秘境ボルネオ戦記－生き残り海軍民生要員の手記』総和社
- 小野俊太郎 (2007)『モスラの精神史』講談社
- 加藤聖文 (2007)『「大日本帝国」の崩壊－東アジアの1945年』中央公論新社
- 木内信 (2011)「野蚕特集にあたって」『蚕糸・昆虫バイオテック』79 (3)、日本蚕糸学会 p.149-151
- 宮内庁編 (2014)『Exposition KAIKO』文化庁 (非売品)
- 久能靖 (2010)『知られざる皇室 伝統行事から宮内庁の仕事まで』河出書房新社
- 河本夏雄他 (2019)「日本におけるクワコの生息地域－フェロモントラップを用いた調査」農林水産省農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター『蚕糸・昆虫バイオテック』88 (1)、p.53-63
- 斎藤哲夫他 (1999)『新応用昆虫学』(三訂版) 朝倉書店
- 佐藤健志 (1992)『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』文藝春秋
- 信夫清三郎 (1988)『「太平洋戦争」と「もう一つの太平洋戦争」－第二次大戦における日本と東南アジア』勁草書房

- 関沢新一 (1994) 「シナリオ モスラ」『発光妖精とモスラ』筑摩書房 p.83-167
- 洋泉社編 (2011)『別冊映画秘宝 モスラ映画大全』洋泉社
- デービッド・カーター (1996)『蝶と蛾の写真図鑑』日本ヴォーグ社
- 中西進編 (1996)『南方神話と古代の日本』角川書店
- 中村真一郎・福永武彦・堀田善衛 (1994)『発光妖精とモスラ』筑摩書房
- 永積昭 (1977)『東南アジアの歴史－新書東洋史⑦』講談社
- 日本蚕糸学会編 (2020)『カイコの科学』朝倉書店
- 布目順郎 (1979)『養蚕の起源と古代絹』雄山閣
- 畑中明宏 (2016)『蚕－生糸を吐く虫と日本人』晶文社
- 扶桑社 (2004)『皇后陛下古希記念 皇后さまの御親蚕－皇后さまの育てられた蚕が正倉院宝物をよみがえらせた』扶桑社
- 扶桑社 (2016)『皇后陛下傘寿記念－皇后さまとご親蚕』扶桑社
- 南ボルネオ会編 (1977)『戦時回想録』南ボルネオ会 (非売品)
- 好井裕之 (2007)『ゴジラ・モスラ・原水爆－特撮映画の社会学』せりか書房

辞書・辞典

- 石上堅 (1983)『日本民俗大辞典』桜楓社
- 大林太良・吉田敦彦監修 (1997)『日本神話事典』大和書房
- 加納喜光 (2014)『漢字語源語義辞典』東京堂出版
- 白川静 (1996)『字通』平凡社
- － (1984)『字統』平凡社
- － (2005)『新訂字訓』平凡社
- 新村出編 (2018)『広辞苑』(7版) 岩波書店
- 福田アジオ他 (1999)『日本民俗大辞典』吉川弘文館
- 増井金典 (2010)『日本語源広辞典』ミネルヴァ書房
- 諸橋轍次 (1957)『大漢和辞典』大修館書店
- 柳田国男 (2018)『祭祀習俗辞典』河出書房新社